

弱虫剣術ライフ！！

A i

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鹿島新當流（かしましんとうりゆう）の使い手、鹿島桜（かしまさくら）は自らが道場を経営する鹿島道場の師範。

——彼の剣は神速。

あまりにも美しく、力強い彼の剣はあまたの人間を虜にしてきた。

主人公である高杉晋介（たかすぎしんすけ）もその一人。

彼も桜の凄絶なる剣技に惚れ込み彼の元で修行を受けることを決意。

剣の道を究めようと志す。

だが、晋介には剣の才覚も実力もない。

道場で最弱のそんな男が根性と意地、だけで強く成長していく様を描いた作品です！
毎日更新予定・・・がんばります!!

目次

はじまりのはじまり

一期一会

修錬場とイヤミな奴ら

練習試合

練習試合

最強と最弱と猛獣と

1

7

14

20

はじまりのはじまり

一期一会

——美しい。

彼の剣に俺は見惚れていた。

自分の置かれていた状況など頭になかった。

それほど彼の剣はただひたすらに美しかったのだ。

どこまでもまつすぐで、それでいて変幻自在。

しなやかでかつ剛毅。

相反する美しさが同居する完全な美を体現する彼に俺があこがれを抱くのは時間の問題だった……。

彼は神速の一振りですべての敵を返り討ちにし、颯爽と俺の元へ近づいてくる。

「怪我はないかい？」

柔和な笑みを浮かべ手をさしのべてくる彼。

そこには戦いで疲労感など一切感じられず、さわやかさがにじんでいる。

腰を抜かして地面に座り込んでいた俺は、彼の手を握る。

「……」

彼の手は侍にしてはあまりにも華奢でなめらかな手だった。

俺は驚きのあまり彼の手をジツと見つめてしまう。

「……？」

当然不思議そうに俺を見つめてくる彼。

俺はなんでもないと首を横に振り、今度こそ体を起こす。

「怪我はないかい？」

心配そうに聞いてくる彼に俺は頷き、大丈夫だと伝えた。

すると、彼は安心したように笑顔を見せ、くるりときびすを返す。

「そうか、じゃあ、気を付けて。またどこかでお会いしましょう。」

そう言つて、去つて行こうとする彼。

見るからに俺と同年代であろう彼の後ろ姿は、今の俺とは比べものにならないくらいに大人びていてかつこよく見えた。

——このまま別れてしまつて良いのか？

そんな自分自身への問いかけ。

答えが頭に浮かぶより先に俺の体は動いていた。

俺に背を向け歩き出そうとしていた彼の肩に手をかけ引つ張る。

当然彼は驚き、目を大きく見開いている。

だが、そんなの関係ない。

息を大きく吸い込み呼吸を整える。

そして、俺は彼の顔に触れそうな距離で自分の思いを叫んだのだった……。

「……………俺に剣を教えてくれ!!」

目を見開いた彼。

だけど、すぐに包みこむような笑顔に変わりそして……。

「いいよ。教えてあげる。」

と応えた。

俺はその答えを聞くと、知らず知らずのうちに笑っていた。

すると彼も笑い出した。

あかね色に染まる殺風景な野原に男達二人の笑い声がこだまする。

こうして俺の剣術修行は幕を上げたのだった……。

くしばらく後く

「ああ!!なんで勝てないんだよ!」

「あはは、やっぱ、俺には敵わないな、晋介?」

「くそっ！明日は絶対勝つ！」

「ふふふ、まあ、せいぜいがんばってよ〜？」

ニツと勝気に笑う桜は木刀を肩に担ぎながら修練場から出て行ってしまった。

「ムカツクー……。」

そうつぶやき俺は畳の上にごろんと横になる。

木組みの天井を見上げながら俺は物思いに沈んだ。

桜と出会ってから早一ヶ月が過ぎた。

俺はあれから毎日あいつの道場に稽古をしに来ている。

剣術など今までやったことのなかった俺であったが、この一ヶ月、あいつに追いつこ

うと毎日毎日血のにじむような練習を行ってきた。

この道場には二十人ほどの門下生が在籍しているがその誰よりも努力してきた自信

があった。

しかし、結果はエブリデイ惨敗。

来る日も来る日も、力量の差をまざまざと見せつけられている。

もちろん、桜の実力が一ヶ月やそこらで身につくモノではないとは分かっている。

だがしかし、桜はおろか他の門下生にも敗北を喫してばかり。

さすがにへこまずにはいられない。

「はあく……。」

知らず知らずのうちにため息をついていた。

「なーにー？へこんでんの、晋介？」

いつの間にか着替え終わった桜が横で呆れたように見下ろしている。

着物の紫色が彼の茶髪とよく似合っていた。

凶星を衝かれた俺はごまかすように大きく反動を付け、立ち上がる。

「よつと……そんな分けねーだろ？明日は絶対勝つから！覚えとけ！」

「はいはい。覚えとくよ……。」

「絶対信じてねーな！」

「あははは。」

声を上げて笑う桜。

馬鹿にしゃがって……。

悔しいがこれ以上なんか文句を言うのもダサいので、足音大きめに俺も修錬場を出る。

すると、桜が「あ……。」と小さく叫び俺の背に声をかけた。

「あ……晋介、この後あいてる？ちよつといっしょに出かけない？」

「まあ暇だが……。」

「暇なんだね！なら着替え終わったら門の前に来て！待ってるから。」

「おい、誰も行くとは……。」

「わーい！」

嬉しそうに走り去っていく桜。

「あ、おい！……。」

彼に大きめの声で呼びかけるが、むなしくも俺の声は届かない。

「全く……。」

俺は呆れた声でそう言った。

あまりにも自分勝手な桜にいたい文句が百個ほど浮かんでくる。

だが、そんな俺の口元には知らず知らずのうちに笑みが浮かんでいたのだった……。

修鍊場とイヤミな奴ら

「ぐえっ!!」

「一本そこまで!」

俺は面をもらい尻餅をついた。

「ふうく・・・。」

桜は剣を左右に振り払う仕草の後、道着の脇に差し込んだ。

額に浮いた汗をぬぐう仕草をする彼だが、あまりにも大げさですぐに演技だと分かった。

本当は余裕綽々だったのだろう。

分かってる、あいつとはキャリアも実力も才能も違うんだと分かってはいるんだけど・・・。

「ああっ!!クソ!また負けたっ!!」

俺は悔しさのあまりうしろに倒れ込みながら、咆哮する。

「あはは、まだまだですなあ。」

そんな桜の明るい声が入り込んで来たため、俺は彼にピツと人差し指を向けて言っ

た。

「次だ、次こそは一本取ってやる！」

「ふふふ、めげないねえ。」

「当たり前だ！お前に勝つまでやるからな！」

「あはは、期待しないで待ってる。」

「逃げるなよ！」

「はいはい、逃げないよ。晋介こそ逃げないですよ？」

「誰が逃げるか！」

「あはは、なら安心したよ。俺、そんじゃあ着替えてくるわ。」

「明日は絶対勝つからな!!」

「分かったよ。また明日な。」

「おう！」

桜はいつもの無邪気な笑顔を浮かべ、ひらひら、と軽く手を振りながら修練場を後にする。

俺はそんな桜の様子を畳に寝転んだままに見送り、しばらくそのままの体勢で天井を眺めていた。

どれくらいの時間そうしていただろうか……。

大分長い間そうしていたような気もするし、それほど長くもない気がする。

だが、これ以上このままにしているわけにも行かないので俺は体を起こすと、修鍊場入り口からがやがやとした複数人の声が聞こえた。

入り口に目を向けると、そこには三人の男達がいた。

そして、俺の気分はめちやくちや悪くなった。

なぜなら・・・俺はこいつらが大嫌いだったからだ。

「およう？これはこれは、晋介殿ではないですか。貴殿も修鍊に来ていたとはいやはや思っても寄らなかつた。そんなところで腰を下ろされてどうされたので？・・・あ、もしや桜殿にまた負けたのですか？」

「うるせ・・・ほっとけ。」

あまりにも鬱陶しいこいつは、この三人組のリーダー格鷹司庄一（たかつかさしようち）で、最も鬱陶しいランキングも俺の中では堂々の第一位であった。

先ほどのものもつたいぶつたしやべり方からも分かるように、正確はねちっこく男らしさのかけらもない男。

自分の事を上級階級だと思っている節があり、俺なんかみたいな平民を見下しているタイプである。

鷹司だけでもめんどくさいのに・・・。

「桜殿はこの道場の師範。負けて当然。気になさらないでよろしいと思いますよ?」「そうです。まだまだ新参者のあなたにしてはよく頑張っていると思いますし。」

このニヤニヤと気持ち悪い笑みを浮かべた鷹司の腰巾着は藤枝宗志（ふじえだそうし）と一条金（いちじょうきん）であり、鷹司だけでも鬱陶しいのにその鬱陶しさに拍車をかけている原因でもあった。

俺はどこか含みを持たせた彼らの言い方に、はらわた煮えくりかえっていたがここで感情的になるほど子供ではない。

俺はそいつらとできるだけ顔を合わせないようにして「失礼」とだけ言い、立ち上がる。

ニヤニヤと嫌な視線を浴びせてきていることを背後に感じながらも俺は気にしないようにしながら修錬場を出て行ったのだった。

次の日、俺は道場に誰よりも早く来て素振りをしていた。

桜と出会ってから、俺は毎日欠かさずここに誰よりも早く来て素振りをしていたので、そうすることが半ば習慣のようになっていた。

「ふう〜……。」

ノルマの千回素振りをこなし、俺は持つてきていた手ぬぐいで汗を拭く。

「おつかれ。」

そんな言葉と同時に首筋にひやりと悪寒が走り、俺は奇妙な悲鳴とともに振り返る。

「うひゃあ!!」

「あはは、変な声ー。」

「・・・びつくりした。桜かよ。」

俺の前にいたのは道着に着替えた桜だった。

彼の手には水の入ったコップが握られている。

さっきの冷たさはこれか・・・。

「おい、桜。びつくりしただろうが!」

「えへへ、そう?でも、喉渴いてるかな、と思ったから持つてきたんだよ。いつも晋介この時間素振りしてるし。だから、感謝してよね?俺のこの気配りに!!」

どや顔で胸を張る桜に俺は呆れながらも感謝の意を示す。

「まあ、そこんところは感謝してるよ。でも、もう少し渡し方を考えろ!」

「いてっ!」

コツンと軽くげんこつを桜の頭に当てると、大げさにいたがる彼。

受け取ったコップの水に口を付けながら畳にゴロゴロと転がり痛さを表現している桜を眺めていたがさすがに突っ込む。

「大げさすぎ。」

「あ、さすがに演技だつてばれてるの？」

「当たり前だろ。」

「あははは。」

「全く……。」

笑う桜と呆れる俺。

いつもと変わらない二人の構図。

そんな当たり前前の光景になぜか俺はおかしみを感じて笑みを浮かべてしまった。

すると、不思議そうにきよとんとして聞いてくる桜。

「ありや、なんで晋介笑つてるの？」

「ん？なんでもない……気にすんな。」

俺はそう言つて照れていたことを隠すように彼の頭をやや乱暴目になで回す。

「わわ……!!頭ワシヤワシヤすんな!!」

嫌がる桜を見て、ようやく満足した俺はよし、というかけ声とともに立ち上がる。

「……よし!!今日もやるぞ!!今日こそお前に勝つ！」

「ふふふ、さあ、ならやりますか。」

「おう。」

た。そう言って立ち上がった俺たちはいつものごとく修練場での練習を始めるのであつた。

練習試合

練習試合

今日も俺は一番乗り。

修練場で一人、素振りをしている。

以前までは夏らしい、気温、湿度ともに高い朝であったが、最近はめっきり秋めいて、素足で畳を歩くと少々寒い。

だが、もうかれこれ一時間近くも素振りをしていた俺の体は汗をにじませ、息を弾ませていくほどに暖まり、体もほぐれている。

最後に、十回ほど全身の力を使い渾身の素振りを行い、「ふうく……。」と深く息を吐いた。

すると、聞き慣れた声が俺の背中に掛かる。

「今日はやけに力が入ってるな、晋介。」

俺は手ぬぐいで額の汗をぬぐいつつ、振り返った。

そこにはやはり予想に違わず、桜がいる。

俺は木刀を方に担ぎつつ明るい声で応えた。

「当たり前だろ。今日は待ちに待った練習試合の日。これでテンションが上がらないわけ無いだろ。」

「ふふふ、そうだね。」

俺の強気な言葉にほほえみを漏らす桜はいつも以上に楽しそうだ。

それもそのはず。

練習試合では道場内の好きな相手と戦うことができるのだから。

もちろん、いつものこの鹿島道場では、私闘は禁じられているため、師範である桜の許可なしでは剣を交えることはできない。

ならば師範である桜であれば好き勝手に戦えるのか、というところというわけではもちろんなく、彼であっても正当な理由無く剣を交えることはできない。

だが、練習試合は違う。

この練習試合は指名制で、自分が戦いたい相手を好きに指名することができる。

ただし、指名したからと言って必ず試合できるのか、というところもまた少し異なり、その指名した相手が承諾して初めてその練習試合は成立する。

なので、自分がしたいと思う相手と必ず試合をできるのかというところというわけではないのだが、でも、いつも戦うことのできない先輩方と戦うチャンス。

これを楽しみにせずいられようか？ いや、いられまい!!

「なにしてるの？晋介……。」

俺は若干引き気味の桜の声で我に返る。

知らぬ間に俺は右手を前へと突き出し、歌舞伎のようなポーズを取ってしまったらしい。

気恥ずかしさをごまかすように、俺は軽く咳払いをする。

「ゴホン……いやまあ、なに。つまり俺も楽しみつつて事だよ。」

「それさつきも聞いた。」

「あ、そうか……。」

あまりにも、冷たい桜の態度に俺は短く二言しか応えられなかった。

「つか、冷たすぎじゃね？二回言ってしまったのは謝るけど、それぐらい許してくれても……。」

いや、それか、さつきのポーズがそんなに気持ち悪かったのかな？

それなら全力で謝るよ！生きててごめんなさい！！

心の中でスライディング土下座をかましている俺をよそに、桜は質問を投げかけてくる。

「じゃあ、晋介は誰と戦うつもりなの？」

「ん……？俺か？俺は如月先輩かな。桜の次に強い人はあの人だろ、この道場では。」

「ふふふ、ほんと晋介は強い人に目がないね？」

「まあな。」

クスリと笑う桜に俺はどや顔で応えてやった。

でも、まあバカにされるいわれはないからなどこからどう考えても。

俺は強くなりたいのだから強い奴と戦うのが目標への最短ルートだ。

それならば、この機会に戦わない手はない。

当然、桜がこの道場のナンバーワン剣士であるのだが、二番目に強い人が先ほど述べた如月玄瑞（きさらぎげんずい）という男。

この男は道場一の剛剣。

彼の屈強な体から生み出される一撃は岩をも砕くと言われるほどの威力をはらむ。

桜の剣は誰もが魅了される美しさをもった剣技であるとすれば、如月先輩の剣技は誰もが圧倒される雄々しさを持つまさに剛剣。

そんな彼の伝説は尽きず、一度など、練習試合で相手した敵の木剣を大上段からの一撃だけでへし折り、それだけにとどまらずその敵の腕までへし折ってしまったというのだからとんでもない剣技だと言うことは想像に難くない。

だが、かといって恐れられ人から敬遠されているのかというところも全くそういうわけでもない。

彼の剣技のすさまじさはもちろんのことではあるのだが、彼には不思議な人徳があり、皆から愛されている。

その腕をへし折られた当人でさえも如月先輩の舎弟に加わってしまったというのだから相当なものである。

俺も如月先輩のことは大好きだし、お手本にしている人ではある。

しかし、一つだけ気に入らないことがある。

それは、あいつらが彼の舎弟であることだ。

「如月殿。本日も勇ましいお姿。体調の方はいかがですか？」

「うむ、万事大丈夫だ。今日は誰と試合えるのか楽しみで仕方が無い。」

「ははは、如月殿に向かってくるバカはこの道場にはいないでしょう。」

「そうか？それは期待外れだのー。桜とでもやるかな。」

「お、それは名勝負の予感ですな。」

わははは、と大きな笑い声で笑う如月先輩とその他三人。

その他三人の内訳はあえて触れまい。

つーか、触れたくない。

——なんで、あの三人が舎弟に入れたのか、まじで不思議だ。

俺はうーん、と首をかしげていたのだがようやく門下生全員がそろったようで桜が道

場の真ん中に進み出て言った。

「全員そろったようだそろそろ始めたいと思う。では皆のものこれより練習試合を始める。礼！」

「「お願いします！」」

張りのある桜の声に続いて野太い男達の声上がる。

こうして、鹿島道場の道内練習試合が幕を上げた。

最強と最弱と猛獣と

「これより練習試合を始める！」

桜の号令により始まった練習試合。

まずは、この道場の師範である桜と、道場内で三番手の剣士、楠政茂（くすのきまさしげ）が試合を行うことになった。

皆の視線は当然熱い。

なんとたつてトツプとナンバースリーの戦い。

どれほどの熱戦になるか・・・とだれもが期待していたのだが。

「んぐふっ・・・！」

胸元を一突きにされ、呻きながら倒れる楠先輩。

誰もが口を開け啞然としていた。

その間、俺は楠先輩の倒れゆく姿を視界に捉えながらもとんでもない驚きに打たれていた。

あまりの衝撃に言葉が浮かんでこない。

ただ、一言、一言だけが頭に浮かんだ。

今の試合を表すその言葉は・・・。

——“圧倒的”。

この一言に尽きる。

日頃、手合わせしていた俺だが、正直ここまで実力に開きがあるとは思っても寄らなかった。

仮にも鹿島道場三番手の男である。

序列で言えばたつた二つしか変わらない。

だが、力の差は残酷なまでに歴然。

一方的な試合内容だった。

楠先輩が立ち上がると、両者ともに礼をして、後ろへと下がる。

崩れ落ちるようにして畳の上に倒れ込む楠先輩に対して、当の桜はと言うと。

「ふうー、あつちー。」

などと言いながら面を外している。

腰ほどまである長髪を掻き上げながら手ぬぐいで汗を拭くその様子はいかにも余裕たっぷりである。

正直、軽く引いてしまったことは否めない。

俺以外の道場の皆も引いてしまって口を開けずにいたのだが・・・。

「がっはっは。さすがは桜！素晴らしい剣技だ。」

地鳴りのような笑い声を挙げたのはナンバーツの如月先輩。

重々しい空気など全く意に介していない様子である。

そんな笑い声に対して桜も嬉しそうに応えた。

「あはは。どうもありがとう！如月さんにそう言つて貰えると嬉しい限りだよ。」

「がっはっは。それはよかつた良かつた。」

二人とも至極楽しそうに笑っている。

その空気感につられ周りも和やかに談笑しはじめていた。

「ところで……」

如月さんのその言葉に空気が固まりぴりぴりとした緊張感が走る。

見ると彼の口元にはどう猛な笑みを湛えている。

今まさに襲いかからんとする顔。

俺はその表情を見た瞬間につばを飲み込んだ。

それと同時に如月先輩も言葉の続きをはき出した……。

「次は俺と戦つてはくれんか桜殿？」

シンと静まりかえる場。

首の後ろがピリピリとしびれた。

呼吸すら苦しいと感じる沈黙の中で明るい声がこだまする。

「ごめんね、それはできない。」

桜はそう言うのと、俺の隣にまですたすたと歩き、俺の肩をポンポンと叩きながら応えた。

「だって、如月さんはこの晋介の獲物だから、ね?」

視線を俺へと向ける桜の口元には笑みが浮かんではいる。

しかし、目だけは俺に逃げるなよ、と伝えているように感じた。

——逃げるかよ……。

俺はそう伝える代わりに一つ桜に頷き、キツと如月先輩を見据えて言った。

「如月先輩! そういうことです! 逃げないでくださいよ!」

そう言うと同時に俺はピシッと木刀の先端を如月先輩へと向けた。

そんな俺の様子を見ていた如月先輩は笑いを抑えられない、という様子で笑い出す。

「クツ……がっはっはっは!。小僧、言うじゃねーか!」

「で、どうなんです? 勝負、引き受けてくれるんですか?」

俺が如月先輩を見据えてそう言うのと、彼は笑いを収めて鋭い眼光を俺に注いだ。

そして、如月先輩はドスのきいた声でこう言った。

「俺を満足させる自信があるんだろうな?」

ビリビリとこの道場全体が震えたように感じた。

だが、俺はあえて一步二歩と踏み出て如月先輩の真ん前にまで近づきこう言った。

「もちろんです。」

それを聞いた如月先輩はしばらくその鋭い眼光を俺に注いでいたが、ふいに相貌を崩しこう言った。

「合格だ。」

二カツと笑う彼には先ほどまでの劍幕は見当たらない。

俺も肩から力が抜ける。

知らず知らずのうちに力が入っていたらしい。

試合をした後以上に疲労した感じがする。

まったく、とんでもない先輩だ。

如月先輩は笑顔のまま俺に握手を求めてきた。

なので俺も差し出された手を握る。

「本気で来い。あれからどれだけ成長したか見てやろう。」

それを聞いた俺は少し勝気な笑みを如月先輩に投げかけて言った。

「ええ、お願いします。でも、俺が勝っても文句言わないでくださいね?」

「たわけ。大口叩きよるわ。」

がっはっはー！とまた例によつて大笑いを爆発させる如月先輩。

俺はそんな先輩の様子を横目に見ながら剣を正中に構えて言った。

「じゃあ、早速やりましょうよ、如月先輩。」

「そうだな、やるか。」

そう言つて如月先輩は俺と二メートルほど離れた位置に剣を大上段に構え向かい合う。

先ほどまで笑みを浮かべていた顔が、今は鋭さのみを浮かべている。

まるで、先輩と剣が一体にでもなつてしまったかのようだ。

静寂。

俺たちを包んでいたのはただただ静寂のみだった。

風の音すらも聞こえない。

そんな静寂……。

時が止まつてしまったような錯覚にすら陥る。

感覚が研ぎ澄まされ、すべてが目の前にいる敵を切り倒すことのみに向かつているのが分かる。

自分の心音とともに高まる集中力。

ぱちつとなにかがはじける音。

集中力が最高潮に達したそのとき・・・。

「始め!!」

戦いのゴングが鳴り響いたのだった・・・。